

財政の健全化比率等について

1 平成30年度（平成29年度決算）の健全化判断比率及び資金不足比率

		上富良野町	早期健全化基準	財政再生基準
実質赤字比率		— (△5.3%)	15.0%以上	20.0%以上
連結実質赤字比率		— (△23.9%)	20.0%以上	40.0%以上
実質公債費比率		10.6%	25.0%以上	35.0%以上
将来負担比率		61.5%	350.0%以上	—
資金不足比率	簡易水道事業	— (△5.4%)	経営健全化基準 20.0%以上	—
	公共下水道事業	— (△2.8%)		
	水道事業	— (△223.4%)		
	病院事業	— (△57.0%)		

2 各比率の算定

(1) 実質赤字比率：一般会計等の実質赤字の比率

$$\frac{\text{一般会計等の実質赤字額}}{\text{標準財政規模}} = \frac{\Delta 220,719}{4,170,032} = (\Delta 5.3\%)$$

(2) 連結実質赤字比率：全ての会計の実質赤字の比率

一般会計	△ 220,719	
国保	△ 123,240	
介護保険	△ 40,320	
後期高齢者	△ 258	
全会計の実質赤字額	ラベンダー	△ 995,062
	簡易水道	△ 823
	公共下水道	△ 1,676
	水道事業	△ 319,561
	病院事業	△ 308,770
標準財政規模（臨財債発行可能額を含む）		4,170,032

$$= (\Delta 23.9\%)$$

(3) 実質公債費比率：公債費及び公債費に準じた経費の比重を示す比率

$$\frac{\text{公債費・償還財源に充てたと認められる歳出（債務負担行為、負担金、繰出金等）} - \text{基準財政需要額に算入される公債費}}{\text{標準財政規模（臨財債発行可能額を含む）} - \text{基準財政需要額に算入される公債費}} = \text{実質公債費比率}$$

平成27年度 $\frac{(693,916+340,884) - 632,708}{4,268,454 - 632,708} = 11.1\%$

平成28年度 $\frac{(683,821+338,192) - 645,036}{4,216,027 - 645,036} = 10.6\%$

平成29年度 $\frac{(693,034+304,131) - 630,361}{4,170,032 - 630,361} = 10.4\%$

3ヵ年平均

10.6%

(4) 将来負担比率：地方債残高のほか一般会計等が将来負担すべき実質的な負債を捉えた比率

	地方債現在高	8,546,086	充当可能基金	2,350,420	
	債務負担行為	0	公債費特定財源	980,253	
将来負担額	公債費に係る繰出	1,968,494	— 基準財政需要		
	広域連合負担	77,110	額算入見込額	6,162,526	
	退職手当負担	1,080,386			
標準財政規模	4,170,032	— 基準財政需要額に算入さ	630,361		61.5%
		れる公債費			

(5) 資金不足比率：公営企業ごとの資金不足の比率

$$\frac{\text{資金の不足額（流動負債（歳出額）－流動資産（歳入額））}}{\text{事業の規模（営業収益の額－受託工事収益の額）}} = \text{資金不足比率}$$

① 簡易水道事業
 資金不足額 $\frac{\Delta 823 (56,965-57,788)}{15,085} = (\Delta 5.4\%)$
 事業の規模

② 公共下水道事業
 資金不足額 $\frac{\Delta 3,776 (384,407-388,183)}{131,604} = (\Delta 2.8\%)$
 事業の規模

③ 水道事業
 資金不足額 $\frac{\Delta 319,561 (19,850-339,411)}{143,013} = (\Delta 223.4\%)$
 事業の規模

④ 病院事業
 資金不足額 $\frac{\Delta 308,770 (96,032-404,802)}{541,495} = (\Delta 57.0\%)$
 事業の規模